季刊

直江の津

◉ かみえちごを考える ◉

通巻21号

春号

2006

3,4,5月

地域の明日をつくる子どもたちへ

上越後で子どもたちの食を考える学校現場での実践から

巻頭エッセイ◉このまちのこと

見知らぬ町が原点に

◉ この人に学べ ◉

わが国3番目の盲学校を開いた人

大森隆碩

配流800年 親鸞の風景

1. 承元の法難と親鸞

【カメラの眼】

長野ぱてぃお大門

蔵楽庭

季刊 直江の津 第21号 春号
2006—3・4・5

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
見知らぬ町が原点に　川村一美　3

■配流800年 親鸞の風景
連載1　承元の法難と親鸞　松野純孝　4

■地域の明日をつくる子どもたちへ
上越後で子どもたちの食を考える
学校現場での実践から　牛木功介　6

■この人に学べ　大森隆碩　18

■カメラの眼　16

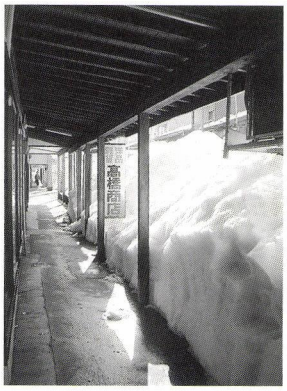
■読書びと
翼よ、北に　アン・モロー・リンドバーグ著　26

■建物さんぽ　24

■上越産業振興研究所レポート　28

■歴史の風景　30

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



20年ぶりの豪雪
この看板のある風景は明治時代と変わらない。（高田本町1）

♣巻頭エッセイ
河村一美さんのこと

旧満州牡丹江に生まれる。帰国後高田に住む。
高田文化協会の事務局長。高田文化協会主催「井東汎賞」を『半玉桃子』で受賞。
三人の子の母でもある。

見知らぬ町が原点に

河村一美

十九歳、つきあっていた彼との結婚話も暗礁に乗り上げ、毎日不安定な気持ちで過ごしていた頃である。余程あぶなっかしいつきあいと見えたのか、「まだ早い」という理由で反対されていた。

もう、いい、別れてしまおう。先の見えない現実にイライラがつのり、「もう、やめましょ」。あんなに好きだった彼から私は、逃げた。

彼のいやがることをすれば、彼から逃げられる。嫌いになったわけじゃない。この不安定から脱出したいだけだった。彼のいやがること、それは外で働くこと。彼は、私が仕事を持つことを極端に嫌っていた。私はとなり町、直江津に働き先を求め、彼から離れた。

となり町なのに直江津は見知らぬ町だった。満州で生まれ引き揚げてきたのちずっと高田で育った。小中高とも学校は二十分も歩けば行ける所ばかり、大学受験に失敗した後も家でブラブラ…。高田しか知らなかつた私にとってバスで三十分足らずの直江津で働くことは大冒険だったのだ。

東京でもなく新潟でもなく直江津を選んだのはきっと、初めてのデートは直江津までウィーン少年合唱団を聴きに行った、二回目のデートはスクーターで直江津海岸へ、初めてのキスは星の煌く砂浜で…という想いが心に残っていたのであろう。そしてまた迎えに来てくれるかもしれない、スクーターで颯爽と。彼から逃げたくせして、彼を待っていたのかもしれない。

仕事は小さなレコード屋の店員。来る日も来る日もキャンペーン曲「アイドルを探せ」「アンコ椿は恋の花」、二枚のドーナツ盤をかけるのが仕事だった。十九歳にもなって世間話のひとつもできない私には格好の職場だった。「ほら、またあの人、あなたを見ているよ」同僚の合図にも聞こえぬふりをして目を上げなかった。

そして、体の変調である。あれよあれよというまに結婚話は現実のものとなり、一ヶ月後には真紅の打ち掛けの中で微笑んでいたのである。なにもできないのに大家族の中に入ること、七ヶ月後には生まれてくる子のこと、などなど考えることがたくさんあったのに、形を変えて行ったり来たりする幾層もの波に勇気を与えられた。前向きに生きる原点が直江津にあった。

あれから四十二年が過ぎた。レコード屋はもうない。しかし直江津と聞くたびに、目の端に幟を掲げた店がまぼろしのように浮かび、「アイドルを探せ」のあやふやなフランス語が口をつく。

そして夫は若々しく颯爽と戻ってくるのである。見知らぬ町が今、私の心を占めている。



配流八〇〇年

親鸞の風景

●連載1

承元の法難と親鸞

松野純孝

承元（じょうげん）元年仲春上旬の候、法然の唱えた専修念仏は禁止された。死刑四人、遠流八人。これはどういう意味をもっているのか。日本最初の法律といってもいい律と令＝律令によってみるとよくわかる。律令は大体七世紀初頭から形成され、明治の新政府も太政官制制定のほか、これを重んじているという。

律令では死刑執行を非常に嫌った。時期は冬に限った。ところが、この承元の念仏弾圧は仲春、即ち二月の上旬で、これは尋常ではない。冬に限ったが、悪逆以上を犯した者はこの限りではないと。律令では重罪として八虐（ぎゃく）（謀反、謀大逆、謀叛、悪逆、不道、大不敬、不孝、不義）があり、その四番目が悪逆。悪逆は直系尊属に対する暴行・殺人予備罪等。③謀叛は亡命・敵前逃亡・投降等を謀る罪。②謀大逆は御陵・皇居の損壊を謀る罪。①謀反は君主に対する殺人予備罪で最も重い罪。相当刑は①が斬、②が絞、③が絞、④が斬で、死刑でも絞より斬が最も重い。承元の法難の死刑四人は全部斬首であった。死刑につぐ罪は流罪で、これには距離によって、近・中・遠があり、遠流が最も重い。八人は全部遠流。遠流中最も重い刑は隠岐（おき）・土佐の地。法然は土佐で八人中最も重い。承久の乱の中心人物、後鳥羽院は隠岐。律の刑法では七〇歳以上・一六歳以下及び廃疾者は刑は軽減された。ところが土佐流罪の法然は七五歳。こうしてみると承元の専修念仏禁止はどんなものであったかが知られる。専修

念仏禁止を訴えた興福寺奏上を参酌してみると最も重い罪の①謀反としたにちがいない。

律令社会は上下のタテの秩序というのを一番重んじた。それは上記の八虐によってよくわかる。鎌倉幕府法になると、ヨコの殺害、これが一番重い罪になる。後に述べるが、法然の専修念仏は何よりも上下の差別を廃し、平等をとなえた。こうしてみると大弾圧をなされるのは当然の帰結といえる。文献の上だけでも専修念仏の弾圧はほぼ五年ごとに繰り返されている。親鸞は最初死刑の宣告だったが、縁辺の取りなしで越後へ遠流となった。

親鸞は二九歳、比叡山を下りて、法然を信じ、法然の吉水禅房に入門。それからわずか四年後の三三歳、法然から『選択本願念仏集』を授かり、また法然の真影図画を許され、その上に法然からその真影に自筆の銘を頂いた。『選択本願念仏集』を授かったものは法然の弟子中六人しかなく、また法然は字を余り書かなかった。入門わずか四年にしてこのことを思うと破格というべきで、法然は格別な思いを親鸞によせていたに相違ない。

親鸞は吉水禅房にじっとしていなかった。遠隔の地まで出かけて行って精力的に伝道していた。当時賤民として卑しめられていた犬神人（弦練作）の層まで念仏者にしていた。延暦寺や興福寺側にしてみれば、このような賤民と同列とする念仏なんて思うだけでも吐気がする。

斬首の安楽、住蓮や遠流の行空、幸西はすでに『三長記』の元久三年（一二〇六・親鸞三四歳）の条に、召し捕えるようにとある。この翌年の承元の法難はこのようなラディカルな念仏伝道で社会的影響力を持っていたものが狙われたのである。

承元の念仏弾圧を女性との風紀問題とする説がある。これでは上記の如き五年ごとの弾圧とか、法然没後一五年も経ってなされた嘉禄の法難で隆寛・幸西・空阿弥陀仏の如き大物の遠流などは理解できなくなる。ここでいう大物とは社会的影響力のある人物ということで、そのような影響力を持たない、地位としては高い長老といったものを意味していないのである。幸西もさることながら、空阿弥陀仏は、法然が京中をすみかとして伝道していたように、一定の居所もなく、人の道場をすみかとし、京中を周遊して念仏をすすめていたのである。

かくして、承元元年（一二〇七）の丁の卯の歳、仲春二月上旬、三五歳の親鸞は越後の国府に流されてきた。

ここでいう仲春二月上旬は、言うまでもなく太陰暦で、今の陽暦にすれば、蕗のとうがもう雪の消えるのを待ち切れず、雪の下で頭をつき出している頃である。梅はつーんと強い香りを放って咲き出す。梅、桜、椿、桃など、もう順番などそっちのけにして、一気に咲き出す。小田嶽夫も言っているように、雪国では春は徐々にしのび寄るのでなくて、いっぺんにやってくる。もう待ち切れないのだ。うちから突き上げてくる生命の躍動を押さえられぬのである。噴き出してくる生命のあちこちでの爆発、爆発である。

春はまず山からやってくる。土の顔が覗くや、子供達は一斉に山に駆けてゆく。土が何より嬉しいのだ。犬は土を蹴り、土に鼻をこすりつける。馬屋から引き出された馬は大地に立つや昂奮してあばれだす。諸所の歓喜の爆発、爆発。長い長い雪で鬱勃と力が漲ってくる。

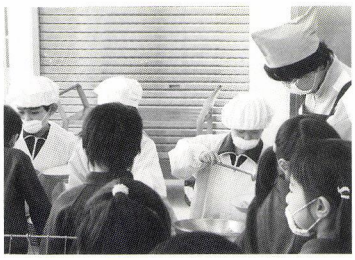
越後の春は一気にやってくる。それは生命の爆発、歓喜の爆発々々。

親鸞はこのような越後の大地にどんな感慨を抱いたのだろうか。

仏教学者／上越教育大学名誉教授・元学長
上越市牧区東松ノ木・一念寺

地域の明日をつくる子どもたちへ
上越後で子どもたちの食を考える
学校現場での実践から

牛木功介・上越市立大濱小学校・管理栄養士











この日は６年生が考えた献立
チャーハン・ニラ飲茶・中華風スープ・中華はるさめサラダ・
杏仁デザート・ウーロン茶
栄養のバランスを考えてあり、大人でも充分満腹感がある

はじめに

子どもはどれだけ食べても大丈夫
肉を食べれば大きくなる

このような言葉を使ったことや、思ったことはいないだろうか？

もし、思い当たることがあるならば、今では通用しない言葉であることを認識していただきたい。

この言葉が通用していたのは、物質的に貧しかった時代の話であり（たくさん食べられるものと言えば、イモ類がせいぜい）、今のように油と砂糖、そして添加物まみれの食品や菓子類など出回っていなかったころの話だと考えてもらっていい。

さらに付け加えるのであれば、子どもは暗くなるまで空き地で遊びまわってくたくたになって家に帰るような〝子どもが子どもらしかった〟時代のことなのである。

〝飽食の時代〟とは、一九七〇年代後半から幅を利かせてきた言葉である。一見、この国の豊かさを象徴しているかのようではあるが、私には皮肉めいた言葉のように響いてくる。

確かに私たちのまわりには常に多種類の食品があふれ、皆が豊かな食生活を送っているような気持ちになっている。

しかし、現実は栄養のバランス、食事のあり方などに多くの問題が見られ、偏った栄養摂取、肥満症等の生活習慣病の増加および若年化など、食に起因する新たな健康課題が増加している。（平成十年度の厚生省発表によると、生活習慣病が原因で死亡した患者数は年間五十万人超、時間に表すと一分間に一人以上が亡くなっていることになる）

食物は人間が成長し、健康に生きていくために欠かせないものなのだが、食べ方に無頓着になった大人や、食べ方を教えてもらっていない子どもたちの食事風景を見ていると、まるで病気になるために口に食物を運んでいるようにも感じる。

病院勤務で感じたこと

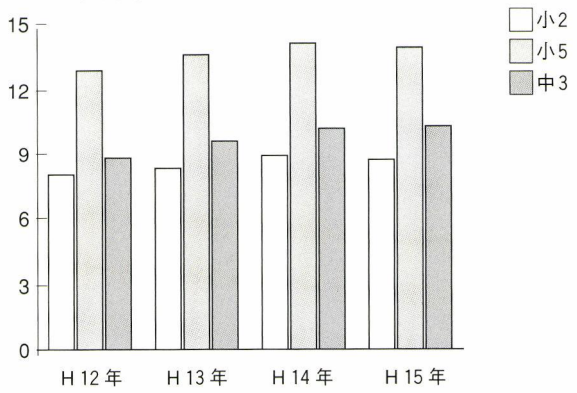
私は学校勤務の前は病院に勤務し、栄養指導のかたわら、スポーツ栄養アドバイザーとして働いていた。

当然のことだが、病院に来る人は体のどこかが不調なわけである。栄養指導員として、私は毎日ベッドサイドに出向いての個別指導や、同じ疾病に悩む患者さんたちに対してのグループ指導をしていた。対象者は四十代後半からが圧倒的であったが、なかには、まれに十～二十代の患者もいた。

内科医の話によると、体調不良を訴えて来院したので血液検査をしてみると考えられないような数値を示す十代の患者が年々増えてきているとのことであった。

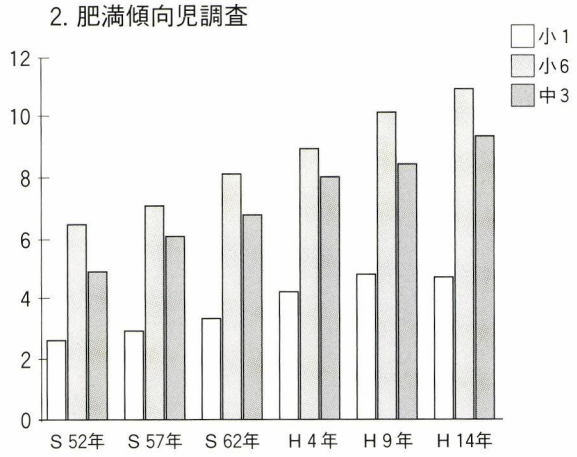
両極化する肥満傾向と痩身傾向

1. 新潟県の肥満傾向児推移



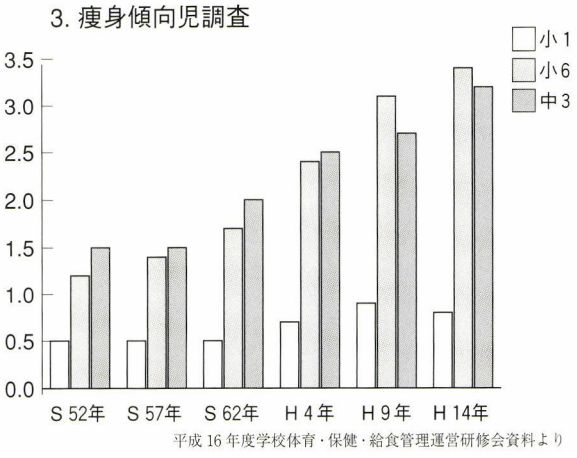
新潟県定期健康診断に基づく疾病状況調査より

2. 肥満傾向児調査



平成 16 年度学校体育・保健・給食管理運営研修会資料より

3. 痩身傾向児調査



平成 16 年度学校体育・保健・給食管理運営研修会資料より

また、スポーツクラブのトレーニングコーチからは、中高校生や大学生の体力（持久力・筋力・柔軟性・精神力など）の低下は深刻な状況であるとも聞いていた。

―原因は一つではなく、さまざまな要因が複雑に絡み合っていて、そのなかでも注目すべきは点は偏った食事である―という前出の二人の見解には私も同意見であった。

二年間の病院勤務が過ぎようとしていたとき、家の都合で故郷へ帰ることになった。就職先をどこの病院にしようかと考えていると、院長室に呼ばれ、院長から「これからは治療ではなく、予防の時代。まずは子どもたちを元気にしてあげなさい」というアドバイスと共に、児童心理学ついての講義をしていただいた。この時、私の次に進むべき職場がきまったのである。

学校での食教育の実践

私が学校現場に飛び込んだのは平成五年四月のことである。当時はバブルがはじけて間もないころだったが、どこかまだ余韻が残っていたような感じがしていたことを覚えている。

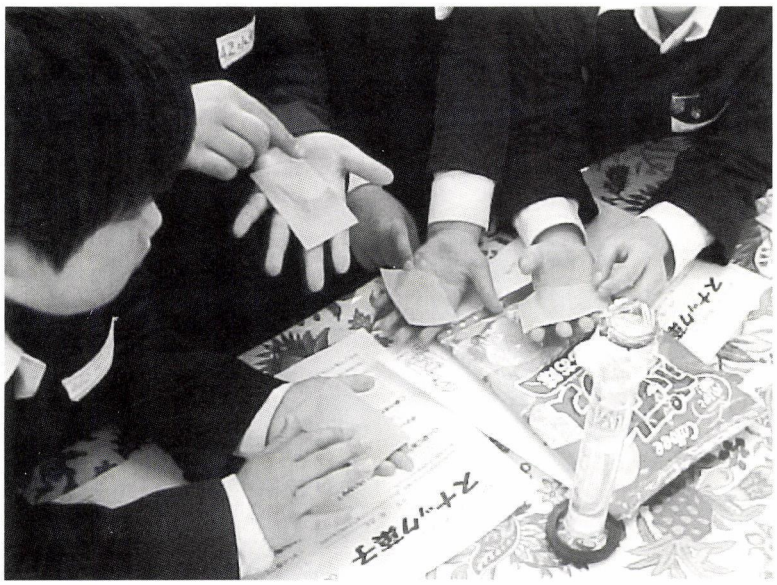
「さて、どこから食教育を進めていくか！」と意気込んだまではよかったが、そこは学校、元気いっぱいの子どもたちの声が響く世界であり、学校現場での食教育への取り組みの必要性を感じているのはごくわずかな職員であった。

保健の先生である養護教諭から肥満児が年々増えていることを聞き、考えていた以上に子どもの体に変化がみられていることを実感した。

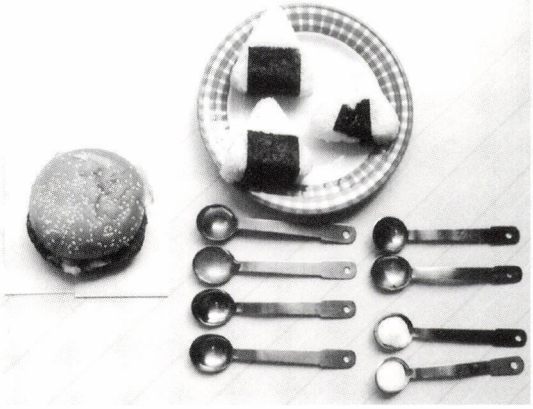
「親が変われば子どもが変わる」という言葉があるが、共働きの保護者も多く、子どもの指導のたびに学校に来ていただくことも困難な状況である。

そこで、指導の場を授業参観日や祖父母学級、ＰＴＡ行事と組み合わせ、子どもと保護者が一緒に問題意識を持ち、解決策を家族で話し合える時間を設けていただきたいと考えた。

つまり〝親子〟で変わってもらえばいいわけである。



指についたスナック菓子の油を油取り紙で拭き取る



照り焼きバーガー
エネルギー：おにぎり約３個分（480Kcal）
脂肪：31.5ｇ 糖分：33.7ｇ

実践例１　授業参観日の授業
おやつについて考える
スナック菓子

スナック菓子の入った紙袋から染み出した油を見る、触った指をあぶらとり紙で拭く、スナック菓子を鍋で煮立ててから油の計量をするなどの活動を多く取り入れた。

おやつのとり方を見直すことは、おやつを楽しみにしている児童にとっては難しいことだった。

しかし、ワークシートの感想を読むと、スナック菓子には「大量の油が含まれている」「食べ過ぎると油のとり過ぎになる」ことを理解し、おやつのとり方について考える必要があると、多くの児童が気づいてくれていた。

また、授業参観日に実施することにより親子で問題意識を持つことができ、おやつのとり方について話し合った家庭が多かったことも収穫であった。

参観できなかった家庭でも、子どもが資料や感想の書かれたシートを持ち帰り、保護者から感想をもらうことで、家庭でおやつについて考えてもらう場を設定することができた。

保護者からの感想

- スナック菓子に油があんなに含まれているとは知らなかった。
- 家族で健康な食生活について話し合った。
- 子どもだけでなく、大人にも必要な勉強だと感じた。
- カップラーメンなどの害についても取りあげてほしい。





献立を作るうえで個別にアドバイスをしていく



実践例2　六年生家庭科
私達の食生活
～献立を立てよう～

栄養バランスのとれた献立の必要性を学習する場面では、栄養士が、偏った食事から起こる健康への弊害を具体的な例を挙げて説明し、児童のおぼろげな知識がはっきりとしたものになるように配慮した。

子どもは、食事と健康についての密接な関係について気づき、日々の食事の重要性を感じることができたようであった。。

献立作りのポイントの説明では、当日の学校給食の献立をもとに、食品を三つの食品群ごとに色分けし、食品数を数値化することで栄養バランスを考えるようにした。

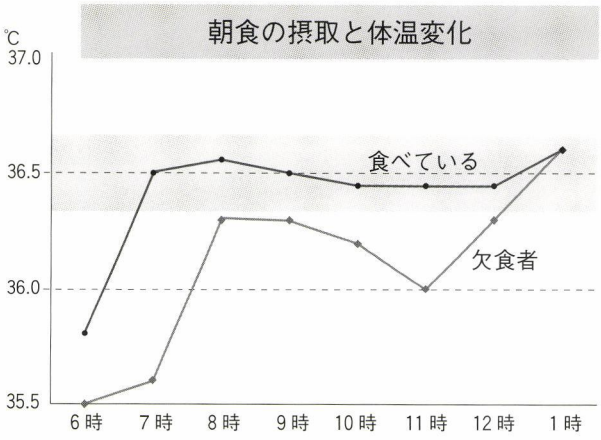
赤黄緑の食品群のバランスを考えていくうえで、緑群を一番多くすることと、総食品数一二～一五を目安に取組ませた。

献立作成時には、児童一人一人に具体的なアドバイスすることで子どもが理解を深め、意欲的に活動を進めることができた。

子どもが考えた献立の基本は

・栄養のバランスをよくするために、汁物に野菜をたくさん入れた。
・油料理が重ならないように組み合わせを工夫した。
・栄養と価格を考えて、季節のものをたくさん使った。
・デザートに甘いものをつけるので、飲み物は牛乳にした。
・緑群が多くなるようにサラダに果物を入れた。

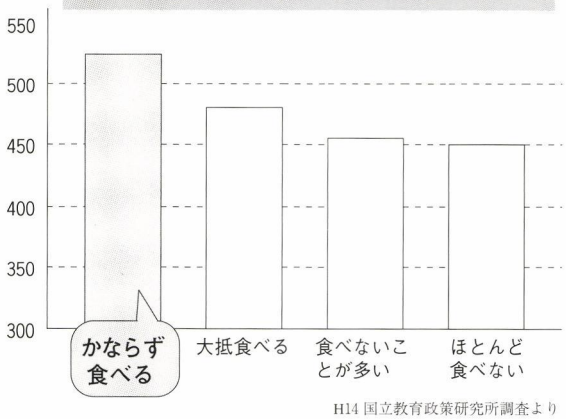
朝食の摂取と体温変化



朝食摂取と体温変化のグラフ：しっかり食べよう朝食　少年写真新聞社



朝食と学力（中学２年生）



H14 国立教育政策研究所調査より

保護者からの感想

- 自分から進んで夕食つくりを手伝ってくれた。いつもより野菜たっぷりの味噌汁を作ってくれ、おいしくいただいた。健康になるための食事を子どもから教えられた。
- 夕食の時に家族で話し合い、三食の中で一番バランスの悪いのは朝ごはんだと分かった。明日からバランスよく作って食べてもらおうと思う。

栄養士が考える頭を良くする方法

「魚を食べると頭は良くなるのか、成績は上がるのか？」そんな質問を保護者や子どもから受けることがある。答えは「NO」だ。食べただけで成績が上がる食物など無い。もしあるなら、近年の学力低下問題も地球規模の諸問題も解決済みのはずである。

学力を上げたいのなら、勉強をする。これは今も昔も変わらない。

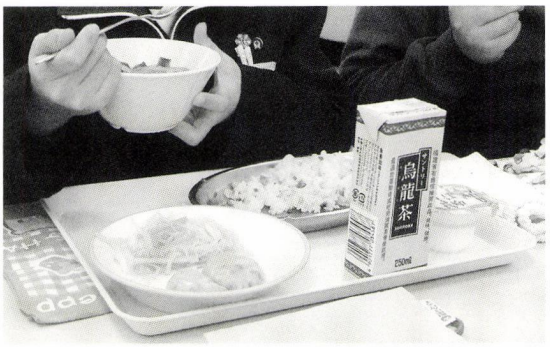
だが、「学習の効果・効率を上げる」という点から考えた場合、食事は大いに関係がある。それがもっとも顕著に現れるのが、〝朝食〟だ。

朝食と学力の関係についての調査研究は、古いもので自治医科大学（一九七〇～一九七一年）、最近のものでは国立教育政策研究所（二〇〇三年）がある。

どちらも、テストの結果を〝朝食を食べている生徒と食べていない生徒〟で比較したもので、毎日朝食を食べている生徒のテスト結果がよいという内容のものである。

大濠小学校の生活習慣アンケートの結果を見ると、朝食摂取率はここ五年で八四から九八％と大幅に上昇している。この結果を単純に考えれば、学力も同じように上昇していいはずだが、そうではないのが現状だ。

そこで、朝食に関する調査結果をよく食べ



る食材、品数、時間の三点から再度検証してみることにした。

その結果、品数において各学年で差があることが分かった。これを学校満足度調査の各項目と照らし合わせてみた。

すると、「学習がよく分かると答えた児童」「自主学習を進んでしている児童」の両項目と「朝食のおかずが二品以上の児童」のグラフのライン形がほぼ一致するのである。

この結果から「ごはんやパンのみの朝食」「おかずはフリカケだけ」という栄養バランスの悪い朝食では、学習効果を上げることが困難であるということを次の理由から推測した。

【理由1】体温を上げることができない

起床時の低体温の状態から体温を平常値まで上げるには最低でも糖質・脂質を摂取しなければならない。また、量が少なくても体温を上げることができない。その結果、昼食時まで脳、ほかの臓器の活動量が低い状態が続く。この状態を続けると低体温症となる。

【理由2】栄養バランスが悪いと体温を維持することができない

栄養バランスが悪いと、体温の上昇に時間がかかる。また、上がったとしても昼食時まで維持することができない。

この結果を保護者に示して、朝食の内容、栄養バランスの大切さについて説明し、子どもたちの学力向上のために「朝食」を核にした生活習慣全般を見直し、改善できるように実践を重ねた。

毎日おこなう全校指導

給食は年間約一九〇回実施されている。

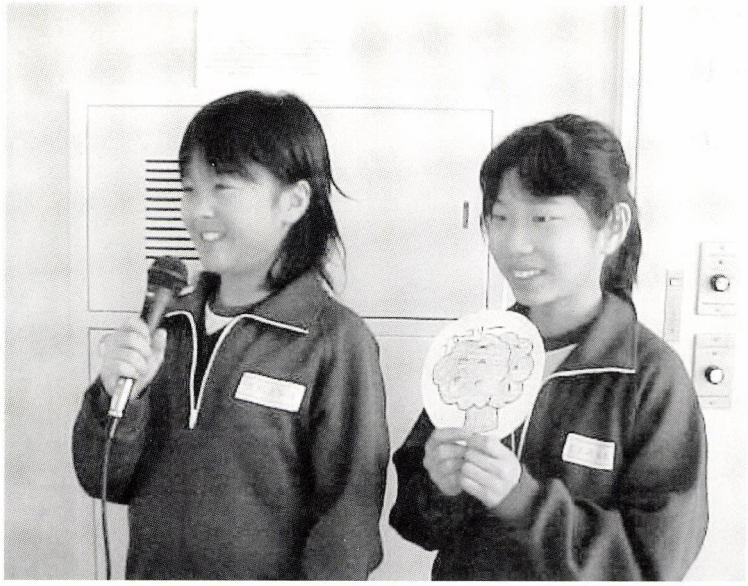
一年間の食事回数から見ると、給食の回数はその五分の一程度にすぎないという考えもあるが、普通授業日において実施される学校給食の教育的意義は大きい。

そこで、食堂で全校そろって給食を食べられる特徴を生かし、当日の給食に使われている食材の〝食べ物の働き3色分けクイズ〟と〝献立に関連付けた栄養アドバイス〟を毎日実施している。

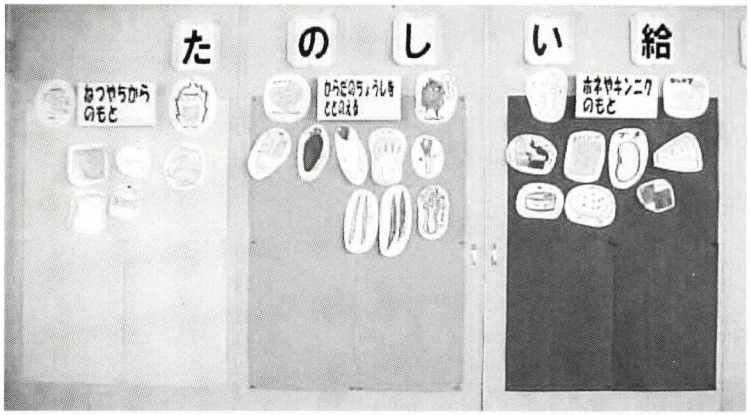
食教育は、健康と食べ物の関係を理解し、興味と関心を持つことが重要である。

今では全学年の児童が、どの食べ物が何色のグループの食べ物なのかほとんどわかるようになり、クイズの答えを聞いて一喜一憂し





当日の献立の組立てについてクイズを行う
児童による食べ物クイズ



ランチルーム正面に掲げられた食べ物３色分けパネル

ながらも、確実に食べ物の名まえや色・形・味をくり返し学ぶ場となっている。

食べ物クイズを始めて五年目になるが、児童が食べ物の働きを理解していると、一年生の「食べ物の働き」、二年生の「野菜の働き」、五～六年生の家庭科や生活習慣病予防の指導の際に、大変スムーズに授業を進めることができる。

このように給食時間の繰り返しの指導は、望ましい食習慣形成の下地作りになっていると考えられるが、給食の時間は、食事の準備、会食、後片付けなどを通して、家庭では培い難くなっている貴重な経験の実践の場でもある。このような給食指導の意義を踏まえつつ児童の発達段階に即して、意図的・計画的に根気よく指導していくことが大切である。

朝食摂取率保護者向け朝食調理実習を上げる

現在勤務している頸城区に赴任して驚いたのは、朝食摂取率が八四％（一六％が食べていない）という低い数値という点である。

生活習慣の建て直しは、朝食からが一番効果的であることは病院勤務時代に叩き込まれていた。対象者をその気にするには、朝食を食べることにより、どんな効果が現れるかを具体的に示すこと、次に簡単な調理方法を紹介することである。

あとは実行するだけである。

学校での朝食調査の結果からは、大多数の保護者は朝食を食べることの必要性をある程度は理解しており、おかずの数の少なさの理由が「時間が無い」という理由が圧倒的であったこともわかった。

それらを踏まえ、調理実習のテーマの一つを「簡単にできる」にした。そして学力向上との関連から脳細胞・脳神経伝達系の成長に欠かせない栄養素を含む食材を使った「脳が喜ぶ」を二つ目のテーマとして実習計画を立てた。

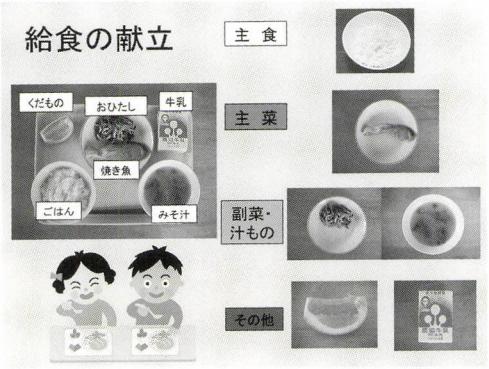
当日参加した保護者は、どんな難しい料理





・準備さえ整えておけば、20分で3品できます。
・常備しておける乾物と季節の食材を組み合わせることによって、安価でおいしいものが作れます。
・特別な調理器具は不必要です。
・朝食の時の会話は「心の安定」のために欠かせないおかずです。朝、子どもと話していますか？

当日の資料
当日の給食の写真を用いて説明した。
実際に食べた給食を例に示すことで主食、主菜、副菜、汁物とは、どの料理のことなのかを理解させた。



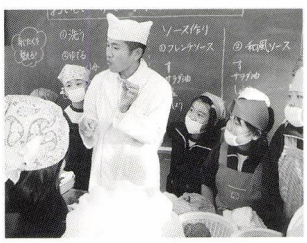
なのだろうかと少々心配したらしいが、どの家庭にでも常備している食材を中心に調理方法を説明し、実際に作って見せることで安心したようだった。また説明の際にメモを取る保護者が大変多く、子どもの学力には強い関心を寄せていることもわかった。

調理実習の後、関連したレシピを今後も教えて欲しいとの声が多く、季節ごとに学校のホームページ上でレシピ紹介をすることとなった。

食教育の難しい点は、子どもの食習慣の形成は保護者や家庭環境の影響を強く受けるというところである。

例えば、六年生が家庭科で献立のたて方を学んでも、家では保護者が食事を作っている。いくら自分の食生活の問題点に気づいても保護者が理解していなければ改善することは困難である。これは四年生のおやつ学習でも同じことがいえる。

保護者や家庭への働きかけのない食教育の計画や実践は「絵に描いた餅」に過ぎない。どのようにして働きかけるか、そして、子どもと共に学ぶ場をどう設定していくかが今後の課題といえよう。



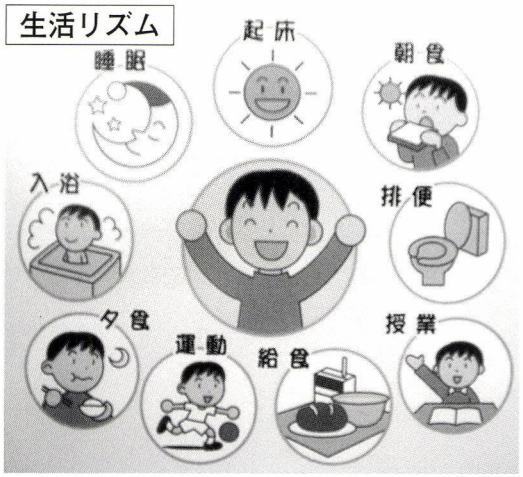
地域への発信

十一月におこなわれた学力向上フロンティア事業研究発表会でのスペシャルタイムで、養護教諭と望ましい生活習慣と学力向上についての発表をした。

朝食をきちんと食べるためには、夜遅くの飲食は控え、早めに寝る。運動、排便…、というように子どもの生活習慣を整える必要性について理解してもらうためのもので、望ましい生活習慣をイラストにし、その必要性について一つ一つ説明を加えていく形をとった。

学力向上も健康な心身の成長も、生活習慣が整ってこそ可能となるという基本的な考えを年度の折り返しとなる時期に保護者とともに再認識できたことは大きな成果となった。

当日の内容については、五、六年生にも説明してあり、保護者と子どもが共通の認識と話し合いの場をもった家庭も多くあった。



生活習慣イラスト：しっかり食べよう朝食
「少年写真新聞社」より

頭の喜ぶ料理
―終わりに―

当校では五年まえより〝頭の喜ぶ料理〟を積極的に献立に組み入れている。そして毎日の献立や話の内容については、当校のホームページで公開するようにした。

食堂では毎日、献立や食べ物についての話をしているが「頭が喜ぶ」と「元気が出る」という言葉を使用した日は、幾分食が進むようだ（もともと栄養バランスがとれている給食なので、毎日が頭も体も喜ぶ献立となっているわけだが、アクセントをつけるという意味で、いい効果を生んでいる）。

すべての子どもが望ましい生活習慣を身につけ元気になる。これができてはじめて子どもの学力が向上し、子どもが本来持っている能力を開花させることができると思っている。

そのためには、保護者と子どもが一緒になって生活習慣について考え、改善することが必要である。

食教育は家庭での「躾」の一環であり、家庭が主に行うべきであることは今も昔も変わりない。しかし、共働き世帯の一般化（専業主婦世帯の減少）、食環境の急激な変化により、家庭における十分な知識に基づく食教育指導を行うことが困難であることも事実である。

すでに食教育は家庭か学校か？　などと討論している状況ではないことを理解していただき、読者のご家庭でも本当に豊かな食卓とは何か？　ということを考えていただければ幸いである。

一九七〇年　上越市西本町一に生まれる。
新潟県職員　学校栄養職員

HPアドレス
http://www.ohbuke.jorne.ed.jp



カメラの眼

「長野ぱてぃお大門 蔵楽庭（くらにわ）」





あまりにもきれいに改装してあるので、保存というイメージがうすれているが、中庭（パティオ）の雰囲気はなかなか良い。



昨年暮れ、長野駅から善光寺に向かう通りの大門交差点に「ぱてぃお大門　蔵楽庭」がオープンした。

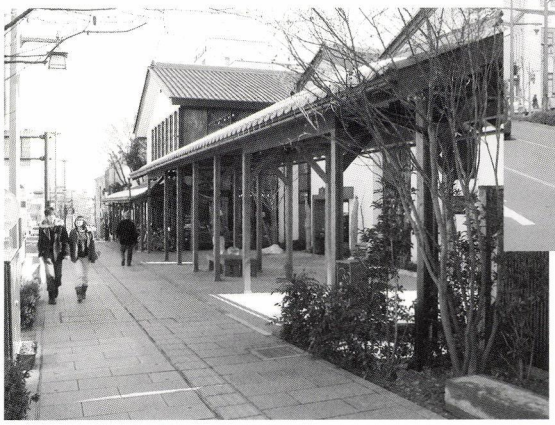
交差点の界隈は、土蔵造りの問屋が立ち並ぶ古いまちで、交差点を越えた善光寺側の賑わいからは外れてしまっていたが、この一角にマンションが建つ計画が持ち上がり、それをきっかけに有志が出資して買取り（現在第三セクターで運営）、一〇棟近い土蔵を移動・改装し、商家の中庭風なパティオを作り回遊できるようにしたものである。

二〇のテナントのうち九店舗が飲食で、その他は高級輸入家具・生活雑貨、小物、ギャラリーなどである。「長野」のみやげ物店は一軒のみ。

善光寺詣でがてらの観光スポットと思って行くと、いささか戸惑うことになり「観光目的でもないのにいつまで続くのだろうか？」という要らざる心配をしたくなる。

しかし、「まちのかたち」を残して、それを活かしていこうという印象は、善光寺という大観光資源と県都であるという条件の違いはあるが、古いまち並みを残すわがまちのどこかのヒントになりはしないか。



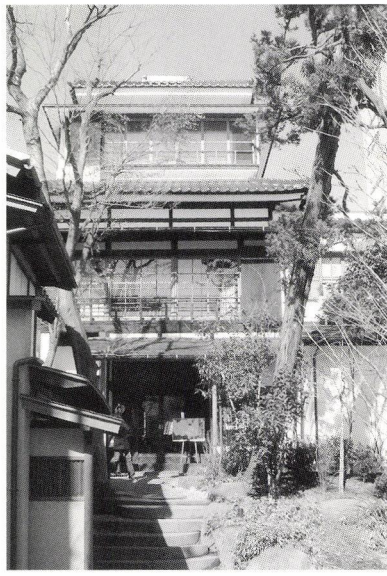


まち並と大変よくマッチしていて、見た目には分らない。

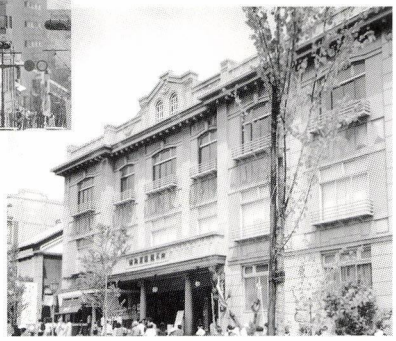
この辺りはビルに変わる。











旅館藤屋も外観を残してリニューアル中。



三層の建物は日本料理店に。茶室もうまく残されている。

この人に学べ



自らの失明の危機に直面し、盲教育の重要性を痛感してわが国三番目の盲学校を開いた人物がいる。大森隆碩である。

生立ち

隆碩は弘化三年（一八四六）五月二二日、高田藩の眼科医を勤める大森隆庵の長男として生れ、嘉永四年（一八五一）から倉石侗窩の文武済美堂に学んだ後、文久二年（一八六二）江戸に出て、土生玄杏に入門し蘭方眼科を学んでいる。

一説には、『明治・大正上越医界史』（以下『医界史』）によると、この江戸行きは「藩財政建て直しには、高田城の外堀を埋めて田んぼにすべきである」という意見書を目安箱に投じて藩主の怒りにふれたため、脱藩して小林重明と改名して江戸に出たといわれている。

そのことは、『地方に初めてできた雪国・高田の盲学校』（以下『盲学校』）にも、隆碩の長女・ミキのメモとして、「目安箱事件以来、小林重明と改め高田町外の村に籍を置き、明治二二年に大森に復籍、大森隆碩と改めた」とある。

以下、『医界史』『盲学校』などに拠って隆碩の経歴をたどってみる。

元治一年（一八六四）二月、父隆庵の死去に伴い、帰郷して北五ノ辻で眼科医を開業することになり、その年の十二月に高田藩医員に任ぜられている。

その後、戊辰の役に従軍し、北陸道大病院医員となり、ウイリアム・ウイリスのもとで傷病者の治療に当たり、明治三年（一八七〇）一月から、高田寺町に置かれた会津降伏人病院医員として治療に従事した。

隆碩は、医学研究には英語の必要性を痛感

＊明治・大正上越医界史　森川政一著（元知命堂病院理事長）

＊地方に初めてできた雪国・高田の盲学校　大森隆碩没後百年を偲ぶ会編（平成一四年十月六日、曾孫田部英一を中心に子孫、学校関係者が集まり、隆碩の百回忌法要が墓所の高田寺町高安寺で営まれた。翌年、当日の模様、関係者の思い出、史料を田部英一がまとめて出版した）

＊倉石侗窩と文武済美堂　侗窩・通称典太は高田長門町の豪商「伊勢屋」倉石家に文化一二年（一八一五）生まれる。倉石家は文芸の家でもあり、長じて安積艮斎に学び、帰郷して私塾文武済美堂を開く。門下には前島密・室孝次郎・瀬尾玄弘などがいる。

＊隆碩の出生地と開業の地を従来、新須賀町とするものが多かったが、『医界史』は北五ノ辻（西城町四）とし、開業も同地としている。高田藩の「分限帳」にも、父隆庵の名前の上に「五ノ辻」と見えるものがある。

＊ウイリアム・ウイリス　英国人、軍陣外科医師　文久二年（一八六二）大使館付医師として来日。戊辰戦争で官軍の医師として従軍。上越地方に西洋医学の大きな影響を与えた。

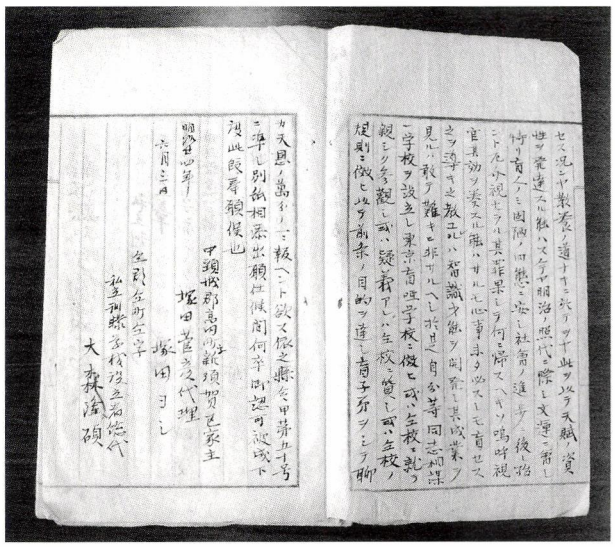
＊大学南校　現東京大学

＊ヘボン　Hepburn　米国人、医師・宣教師　安政六年（一八五九）伝道と医療目的で来日。日本最初の和英辞典『和英語林集』を「美国平文」の名前で編纂。聖書の和訳のために「ヘボン式ローマ字」を開発。ヘボン塾を開き後の明治学院大学の基をつくる。

＊岸田吟香　天保四年（一八三三）岡山県美咲町に生まれる。元治一年（一八六四）ヘボンに眼病の治療を受け、助手となって『和英語林集成』の編纂に携わる。ジョセフ・彦の下で日本初の新聞「海外新聞」の創刊に参加。ヘボンから伝授された我国初の西洋目薬「精奇水」を発売。東京日日新聞の編集長になり我国初の従軍記者として「台湾事変」を報道。明治十三年（一八八〇）築地に日本初の盲学校「楽善会訓盲院」（東京盲学校・後の筑波大学付属盲学校）を開設する。画家岸田劉生は吟香の四男。

し、この年の四月、上京し大学南校で英語を学んでいるが、在学中に米国人で医師兼宣教師のヘボンに出会い、横浜で施療院を開いていた彼の下で眼科を学び、明治五年、上海にも同行している。この間、岸田吟香とともに、ヘボンの『和英語林集成』の編纂（改定第二版か）に携わっている。帰国してから、米国人医師シモンズについても学んだといわれている。

明治十年、姉の嫁ぎ先の鈴木医師の死去により、乞われて帰郷し相生町（仲町二・別院大門通）で眼科医を開業した。新進の洋方医として名声も上がり、二九年には新須賀町に居を構えている。



明治24年6月3日付の学校設立請願書
7月22日付で知事の認可がおりた（高田盲学校）

「訓瞽」へ

開院から十年になる明治十九年、隆碩は患者から眼病をうつされ、失明の危機に瀕するという事態が起きた。

日ごろ多くの眼病の患者を診療し、失明の断を下してきた自分が、実際に自らが光を失うという危機に直面し、計り知れない恐怖心に襲われることになった。そして、今まで、盲人の心の苦しみや悩みにまで思い至らなかったことを痛感させられることにもなった。

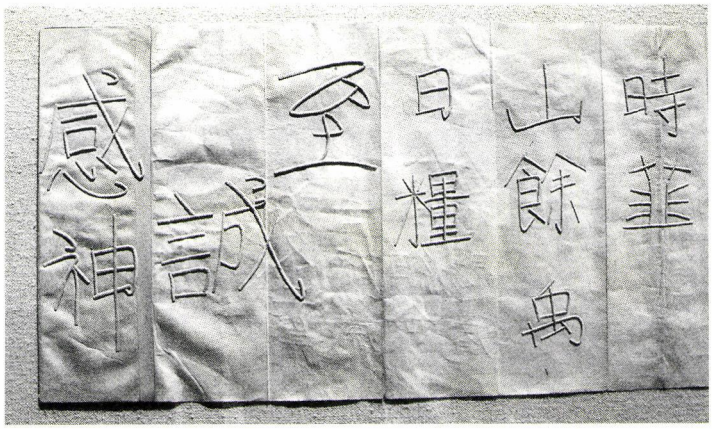
そのとき隆碩が考えたことは、患者を治療するだけではなく、目の不自由な人たちの自立した生き方を支える教育の必要性だった。

隆碩は、医師の杉本直形、小池玄育など二九人の同志とともに「訓盲談話会」を組織、明治二十年（一八八七）一月、寺町光樹寺において発会式をあげた。会員の半数は視覚障害者だったという。

その年の十一月三十日「盲人矯風研技会」と改称し、視覚障害者に鍼、按摩、琴などの教授を始めた。（後にこの日が盲学校の創立の日と定められた）

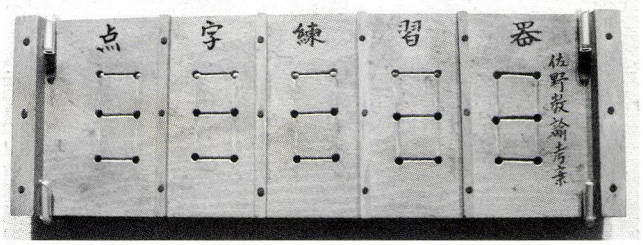
この間、中頸城郡鍼灸組合が結成され、隆碩は第二部組合長に就いている。

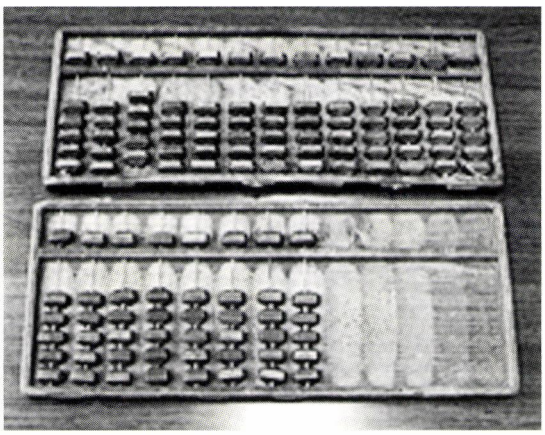
隆碩は、盲人矯風研技会を発展させるには学校設立が急務と考え、許可の請願書を県に提出したが、当時の障害者教育に対する認識の無さもあって、組織・設備の不備を理由に再三却下された。四度目の出願でようやく明治二四年七月二二日、学校設立の許可がおり、「私立訓瞽学校」と命名された。盲人教育の学校としては、日本で三番めという早さで



写真上　点字練習器
盲学校の佐野教諭が考案した「点字練習器」(高田盲学校)

写真下　そろばん
大森隆碩が考案した「盲人用算盤」(高田盲学校)







写真上　こより文字
点字以前に使用された「こより文字」の折本
手でなぞって文字を認識する(県立歴史博物館)
同館では、実際に手で触って体験できる

写真下　木彫りの凸文字(高田盲学校)

あった。

校舎を新須賀町(仲町二)の民家を借り、普通科・技芸科の二課とし、修学年限を四年としている。内容は講話・読方・作文・算術・地理・歴史・音楽・鍼・按摩であった。

教育も旧来の方法に甘んじることなく、正式に学校として認可されると、東京盲唖学校(岸田吟香との縁と思われる)に人を派遣し教授方法を学ばせているが、そのなかで凸字から点字に切り替えるなど、新しい教育方法を一早く取り入れている。

二六年に隆碩が初代校長に就き、二八年には、二名の第一回卒業生を送り出した。

三三年六月病気のため校長職を辞し、三六年十月五日療養中の東京で、盲人教育に捧げた五七年の生涯を終えた。

校名について注目すべきは、多くが「盲唖」学校であるのに対し「盲」のみとしたのは、隆碩が両者の教育方法がまったく違うものと認識していたためであり、また「瞽」の字を用いたのは肉体的な面だけではなく、心の「啓瞽」の意味も含めて「訓瞽」と名づけたといわれている。ここに、隆碩の医師としてだけではなく、教育者としての志の高さを窺い知ることができる。

苦難の学校経営

学校は明治三三年に私立高田訓瞽学校、四十年に高田訓瞽学校、大正四年には高田盲学校と改称するが、学校の維持は楽ではなく、私財を投じ寄付を募る困難な事業であった。

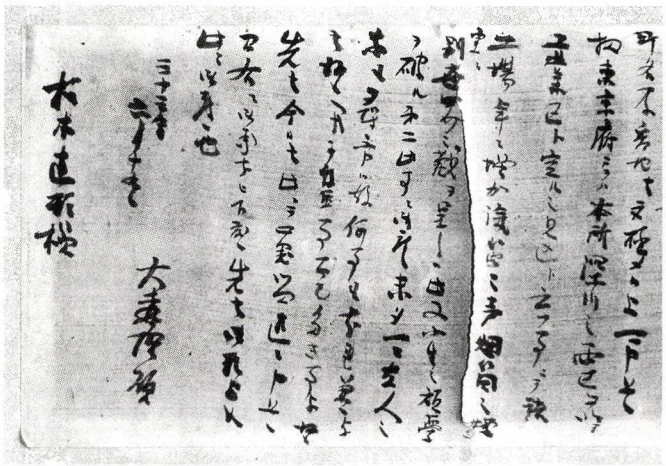
＊『盲学校』は、隆碩が上海から帰国して高田で開業までの間について「新聞社に入る、次に前島氏をいただく駅逓寮（郵政省）に勤務する」とし、詳細は不明としているが、吟香や前島密とのつながりを示すものと考えられる。

＊杉本直形　天保十年（一八三九）高田藩士の家に生れ、京都で蘭方医学を学び、帰国して藩医杉本直臣の養子となる。明治一四年（一八八一）上小町（本町四）で開業。

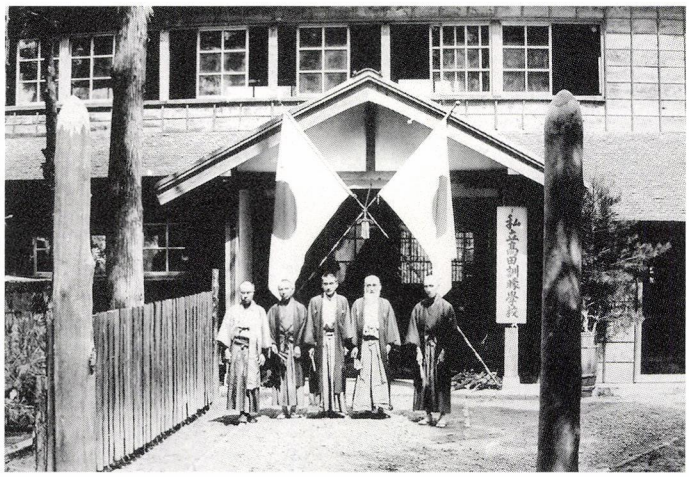
＊小島彦造　明治一年（一八六八）栃木県生れ、明治二九年、郡立高田病院の眼科医長として招かれる。三四年、市ノ橋（大手町）で開業。患者本位で昼夜・休日を問わず診療、風体に頓着せず奇行の持ち主でもあったという。

写真上
明治32年6月　隆碩が東京へ去るに当たって
杉本直形に当てた手紙（部分）（高田盲学校）

写真下
新潟県立歴史博物館の「新潟県のあゆみ」をテーマとした一部屋に「近現代の新潟」の医学者に大森隆碩の名をあげ、また高田盲学校創設期に関わる展示コーナーが設けられている。







明治42年9月　寺町の天崇寺境内に新校舎落成
右端が隆碩　ひげの人は杉本直形

その窮状を見た日本メゾジスト高田教会のJ・G・ダンロップによる毎月六円という定期的な寄付の申し出は、明治二五年から三三年六月まで続き、経営の大きな支えとなった。

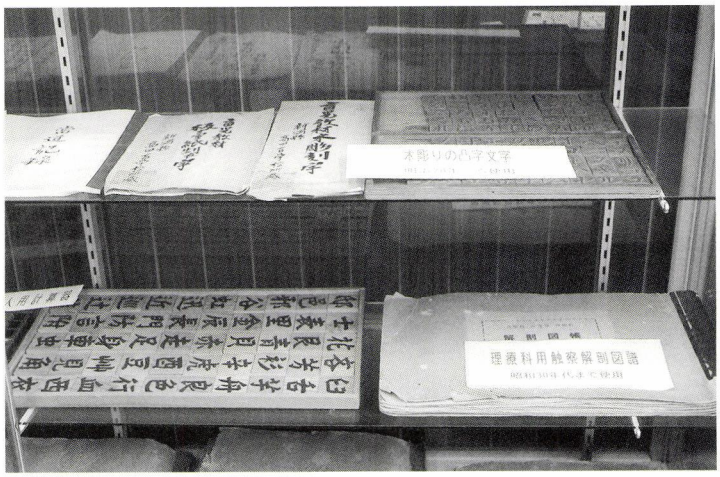
しかし慢性的な経営難には変わりなく、募金団体の組織、篤志家による寄付、相変わらずの私財の投入で危機を切り抜ける状態は、県立に移管されるまで続いた。

そのなかで、眼科医小島彦造は、施療奉仕や無給で講師を勤め、彼もまた私財を投じて学校の維持と盲人教育に尽くした。

昭和二三年、敗戦の混乱で補助金や寄付が絶たれ、ついに廃校を決めるに至った。しかし、当時の高田市が伝統ある学校を廃校させるわけにはいかないと、同窓会などとはかり、県立移管運動を展開、二三年には視覚障害者にも義務教育が適用され、二四年三月三一日念願であった県立移管が実現し、新潟県立高田盲学校となった。

＊

高田盲学校は平成十八年三月三一日、高等部は新潟盲学校、小・中学部は上越養護学校内に新潟盲学校の分校として移転することに決まり、地域の視覚障害者教育に対する一抹の不安と、一二〇年にならんとする、医療と障害者教育に注いだ地域の人々の熱き想いを残して、その歴史に幕を閉じることになった。



現在の盲学校の建物は、上越地域福祉総合拠点として整備され、盲学校に展示されている資料も同施設内に展示される予定

隆碩の残したもの

隆碩は、明治十一年、高田病院長武者春道とともに、新潟県医師会の起源となった医事会を発足させ幹事に就き、十七年には大日本私立衛生会高田支会を設立、二十年、中頸城郡医師組合を結成し初代組合長となって地域の衛生思想・医療の発展に尽くし、二六年の郡立高田病院の経営危機には再建に奔走、院内に私立産婆養成所を開設している。

また、高田女学校の創立にも尽力している。高田女学校はキリスト教系の私立の学校で、従来の家政中心の女子教育ではなく、普通教育を重視する教育で、外国人による本格的な英語教育を始めとする普通教科と宗教に関する教科があり、年限は四年であった。地方初ともいえるオルガンによる唱歌など教育水準は高かった。

人柄については、大変激越な性格の一面を持っていたようで、友人と激論の末、約束どおりとして、友人の腕を切り落としたというようなエピソードもある。

なお、次女のミツは高田女学校を卒業し、後に東京盲唖学校の教師になり、十年の歳月をかけて『言海』の点字写本を完成、点字翻訳、点字地図の作成にも取り組んでいる。

米山検校よねやまけんぎょう

世界最初の盲学校を設立しようとした人

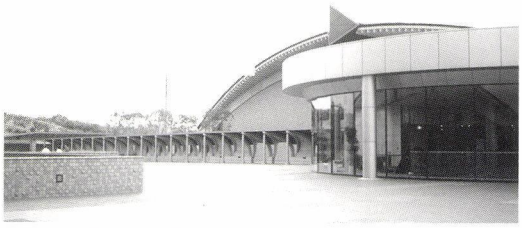
元禄一五年（一七〇二）現在の柏崎市長島の徳左衛門の三男に生まれた銀一（ろういち）は、生まれながらの盲目で按摩修業に入ったが、享保二年（一七一七）に江戸へ出て、辛苦して座頭の最高位検校にまで昇りつめた。彼は莫大な財産を投じて盲人のための学校を建てようとし、幕府や検校の総元締めに請願書を出したが、既得権益の崩壊を恐れた検校所の圧力で不許可となった。実現していれば、世界初のパリの盲学校よりも三十年も早いものであった。銀一は、男谷（おたに）家の旗本株（名跡）を取得して当初男谷検校と称したが、後に米山検校と改名している。

男谷検校の子である男谷小吉も勝家の株を取得し、わが子を勝家の養子にした。後の勝海舟である。

参考資料
明治・大正上越医界史　森川政一
地方にはじめてできた雪国・高田の盲学校　大森隆
碩没後百年を偲ぶ会
新潟県教育史夜話　頸城編　新潟県教育史研究会
高田市史　高田市
上越市史　通史編5　近代　上越市
高田摘誌　村山和夫

協力
新潟県立歴史博物館
新潟県立高田盲学校

新潟県立歴史博物館



■長岡市関原町
電話　0258－47－6130
開館　9時30分～5時
休館　月曜日
入館　大人400円

二〇〇〇年八月にオープンした「歴博」は、国道八号線を上越方面から向かって、いよいよ長岡の市街地へ下りて行こうとする関原の丘陵地にある。この辺りの馬高遺跡からは火炎型土器が出土するなど、古い歴史を持つ一帯である。

館内は大きく四つに分けられている。最初に「新潟県のあゆみ」として、古代から近現代まで一気に越後の歴史を知ることになる。次の「雪とくらし」は、実物大に高田の雁木のまちが再現してあり、竹田下駄屋もそのまま再現されている。また二階からは、雪下ろしやそりを引く人々が見え、冬の日の暮れなずむ頃の懐かしい風景がある。

以下「米づくり」、「縄文人の世界」、「縄文文化を探る」と続いている。

史料とジオラマがバランスよく展示・解説されているため、実物を見過ごしてしまいそうだが、新潟県を全体的に見通せる場として、一度は訪ねてほしい。





雁木通りの町並を歩いて展示室の2階にあがると、雪おろしの風景を見ることができる。
右　竹田下駄店
左　雪のトンネルを歩く角巻の人



建物さんぽ

その一　柿崎の砂丘にて……

砂丘の上の浄善寺を初めて見た時、キリスト教会かと疑い、海側の参道から見上げれば、さらに圧巻。大欅の根が擁壁を破り、潮風に三尖塔が聳え立つ。

ゴシック尖頭アーチと細窓に出隅の玉縁飾り。昔のやんちゃ坊主はその玉縁を素手と裸足でよじ登ったと聞く。

完成時には南方仏跡ボロブドゥール風の尖塔屋根だったが、激しい海風で、改修のたびに姿を変えてきた。当時の面影を知る人々は、淋しく感じているという。

「図面は残っていても、建築家の名前はわからずじまい。高名な伊東忠太博士も見学に来たそうだ」と、話してくださった。謎の設計者を探りたい気持ちに駆られる。

本堂は限りなく優美。梁に描かれた淡い藤色の文様と潮風に赤錆びた相輪。御堂に掲げられた東京葛飾の学童疎開写真のその子らも、齢八十に近い。戦後、お寺は地域福祉の場で、保育園や避難所も兼ねていた。

尖塔の窓から身を乗り出せば、墓地と大欅の向こうは西方浄土に至る海。ここのお墓になら、入ってみたいとも思う。

昭和二年の鉄筋コンクリート造は、たびかさなる大火の教訓であるが、明治三六年築の木造庫裏は、耐え抜いてきた。磨きこまれた柱や敷居に、守り続けてきた人々の愛惜が秘められている。

お隣の浄福寺も鉄筋造りながら伝統和風を踏襲している。しかし、木造とは異質の色白さ。真夏の陽を浴びる墓地も妙に明るい。本堂の薄闇に、花祭りの主役の白象が満艦飾で鎮座する。可愛い小さな目だけれど、子ども達には不気味らしい。目隠しにされることもあるという。持ち回りで当番寺院がお守りしている。

信仰のための建築には相応の様式があり、わかりやすい。シャープで無宗教の近代建築も多かったが、何故か、シンボリックな幾何学形状に、別れの辛さがひしひしと増幅される。亡き人の想い出と甘い涙に抱擁されるだろう。この二寺、ともに浄土真宗の寺である。

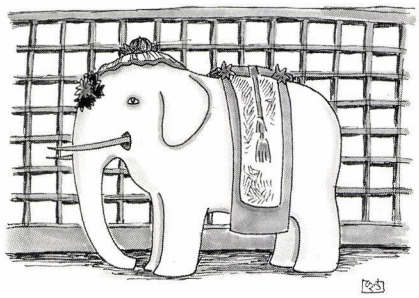
伝統様式に安住するわけではないが、受け継がれてきた時間と人々の記憶に包まれる空気は優しい。似た素材で同形に真似ても、商業建築には絶対に流れない空気である。西洋風でも、本来の古い教会堂とホテルのチャペルは、違うように。

八号線で柏崎に向かい、法音寺信号を越えれば日本海と信越本線が眼下に並行し、そこに偶然、上下の列車がすれ違えば、もう宝籤に当たったほど嬉しくなる。それもあってか、柿崎と海に、心は惹かれる。

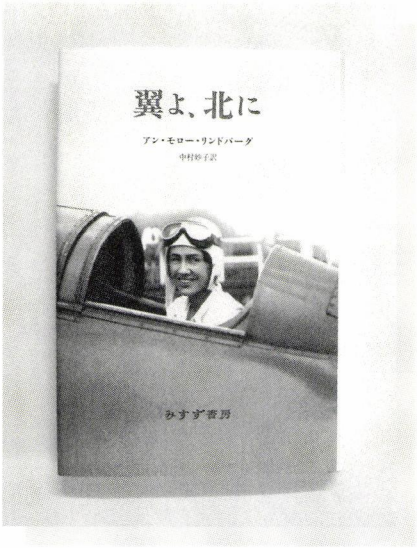


文　せきゆうこ
画　ひぐちきみよ

■浄土真宗本願寺派　淨善寺
■浄土真宗本願寺派　淨福寺
伊東忠太　建築学者　慶応三年～
昭和二九年（一八六七～一九五四）
米沢生まれ　建築界初の文化勲章
受章　東京築地本願寺・平安神宮・
明治神宮・米沢上杉神社等を設計



■読書びと



翼よ、北に

アン・モロー・リンドバーグ著
中村妙子訳
みすず書房刊
二四〇〇円

一九二七年にニューヨーク・パリ間無着陸飛行に成功し一躍世界の英雄となったチャールズ・リンドバーグが、『翼よ、あれがパリの灯だ』を発表し、ピューリッツァ賞を受賞したのは世紀が新たな折り返しを迎えていた五四年。その翌年、四九歳のリンドバーグ夫人は夫と五人の子供を残し、一人で海辺の休暇を過ごした。

ボランティア活動家にして文筆家であり、母として、主婦としての女の仕事をこなす〈日常生活という名の綱渡り〉。過去の経歴をはなれ「浜辺と同じように、どこまでも続く空っぽなものになる。打ち寄せるきょうの波が、きのうまでのすべての跡を洗い去ってくれる」のを待つ。そこから、アメリカという国の文明生活を見据え、シンプルな暮らしへの希求と、何よりも男と女の関係が二人の間の孤独と、無限のその距離をいとおしむ心映えで支えられていると綴る、彼女の代表作『海からの贈り物』が世に届けられた。私は吉田健一の名訳（新潮文庫）で身辺一冊の本としていたが、二十年後に新たに書き加えられた一章とともに落合恵子が世に問うた新訳（九四年・立風書房）を得て、アン・モロー・リンドバーグの名前はこの国の女人達にますます大切なものとなったと思う。

アンは一九〇六年ニュージャージー州に生まれる。大使に就任した父とともに移り住んだメキシコで、リンドバーグの操縦の元、初めて飛行機に乗った。二九年に結婚、操縦・無線技術も身につけ女性飛行家の草分けとなる。三一年には北太平洋探査飛行を夫婦で決行し、カナダ、アラスカ、カムチャッカ、千島列島をへて日本、中国を訪問する。その経験を題材に三五年本書NORTH TO THE ORIENTで作家デビュー、その後も飛行と執筆活動を続け、余生をすごしたバーモント州の農場で、二〇〇一年、九十四歳でまさに二十世紀とともにこの世を去った。

彼女の処女作『翼よ、北に』は戦前の翻訳から六七年を経て、中村妙子（ナルニア国物語のC・S・ルイスの訳者として記憶される）の手により新訳され、二〇〇二年八月に上梓された。

航空黎明期に北極海に沿って単葉水上飛行機シリウス号を駆り、狩猟基地や島伝いに着水と飛行を繰り返す日々。大圏航路の科学的な記録ではない。寒村で出会ったイヌイットやロシア人、国後島の漁夫との一夜の交歓が言葉をこえて夫妻に新しい文明観を纏わせる。技術的に未熟な妻を一人前のパートナーとして遇する夫の心理と、「やっぱりそう言うと思ったわ」「まったく男の人っていつもこうなんだから」という妻の独白も微笑ましい。日本滞在中の見聞録は、茶道や文物への謙虚な感動が綴られ、敗戦でこの国が失ったものの横貌を遺している。

加賀千代女の「とんぼ釣／今日はどこまで／行ったやら」の句を、小さな男の子を亡くした母親の気持ちを歌ったもの、と教えられる一節では、旅とその記録執筆の間の三二年におきたリンドバーグ家の長男誘拐殺害という世界を震撼させた事件に遭ったアンの諦念に胸打たれる。

「『サヨナラ』を文字通りに訳すと、『そうならなければならないなら』という意味だという。（略）けれども『サヨナラ』は言いすぎもしなければ、言い足りなくもない。それは事実をあるがままに受け入れている。人生の理解のすべてがその四音のうちにこもっている。」（中村訳）

四文字の日本語にこめられた隠喩を、想いをこめて書き残すアン・モロー・リンドバーグ。吾が須賀敦子が、遺著の『遠い朝の本たち』で、記憶の彼方に書名も朧なアンの日本紀行、として愛惜をこめて記したこの本と新世紀に出逢えた感慨も含め、「こんなふうにまやかしのない言葉の束を通して自分を表現出来る（須賀）」」勁く美しい星女からの贈り物を読んでいる。（槇）

食



カタコの酢味噌和え

日当たりのよい斜面を紫色に染める可憐なカタクリは、早春を代表する山野草である。実生（みしょう）から花を咲かせるまで七、八年もかかるわりには、花の命は短い。

上越地域では、カタコとかカタッコとか呼ばれ、さっと茹でて酢味噌和えにする。少し口に入れ、ゆっくりと酒を含めば、春の香りが口いっぱいに広がる。

県外では天然記念物級の扱いの地域もあるので、食べるなら春からのお裾分けていどに。

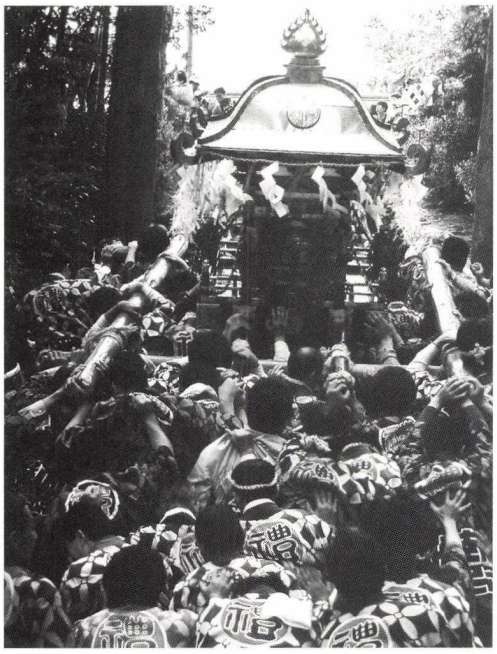
ちなみに、本来の片栗粉はカタクリの球根（鱗茎）のでん粉から採る。

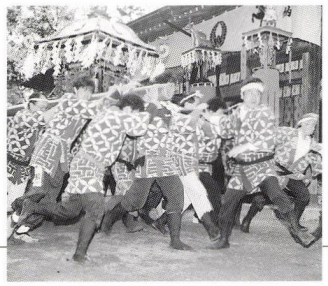
祭

四月に入ると、各地でいっせいに春祭りが始まる。

写真の春日山下の春日神社の春祭りは、四月二二日の朝から大豆・春日・中門前・谷愛宕の集落を一日かけて神輿と山車が巡る。日暮れころ神輿は一気に神社の石段を駆け登る。

四月　十日　糸魚川天津神社　けんか祭り
　　一八日　早川谷白山神社　けんか祭り
　　二四日　能生白山神社
五月　一日　新井白山神社　風祭り
　　四日　五智白山神社　五智の祭り
一五日　寺町日枝神社　青葉祭り





上越産業振興研究所レポート

かみえちごを例外の地域とするために

研究所レポート連載にあたって

直江津・高田両信用金庫が合併し、上越信用金庫が誕生したのを契機に、上越地域の産業振興を目的に平成16年4月設立されたのが、上越産業振興研究所である。

本誌に当研究所のレポートを連載するに当たって、読者のご理解をいただくために、第一回では、その発足の経緯と研究所のめざす方向について紹介しようと思う。

研究所設立への時代背景
―時代の潮目が変わる―

「国土の均衡ある発展」は、戦後の復興から高度経済成長を遂げたわが国の政権党が掲げる、ゆるぎなきスローガンであった。

しかしバブルの崩壊以来、国・地方自治体の財政は逼迫し、そのしわ寄せは国民の負担増と給付の削減となり、「三位一体の改革」というスローガンのもと、地方への権限移譲は補助金と交付税の削減につながり、消費税率アップは、上げ幅とその時期が議論となりつつあるのが現状であるといえよう。

このような時代背景にあって、かつての常識は常識でなくなり、多数意見は少数意見にと様変わりすることも多い。

公共事業を増やして景気を良くしようとは、誰も言い出さなくなった。

バブルの崩壊直後、景気浮揚策として個人消費を喚起するため「地域振興券」という商品券を配ったことも、「ふるさと基金」と称し、すべての自治体に1億円も給付されたことも、はるか記憶の彼方のことになった。

国会議員の力量が、どれだけの予算を選挙区に獲得して来るかで計られた時代もあった。

「雪深い越後でも都会並みの便利さを享受すべき」と、多くの公共事業を地元に誘導した田中角栄型政治は、わが新潟県民にとって良き時代の郷愁を誘うものではあっても、その再来や期待どころか利益誘導として否定される時代である。

一方、都会では右肩上がりの経済成長を望めなくなると、住人たちは地方への配慮と力を急速に失ってきているようだ。山奥の郵便局は非効率として廃止もやむを得ない。あまり車の走らないところに道路や橋を造らなくていい。農産物や食肉が高すぎる。などの不満が反映したのか、昨年の総選挙では「改革」を掲げる政権党が都市部で圧勝するという現象が起きた。

このような現象を見るとき、「時代の潮目が変わった」と言えるのではないだろうか。

上越〈かみえちご〉の現状

急速な少子化により日本は人口減少国となり、地方へ行くほど年齢構成の高齢化は加速度を増している。

また、担税力の衰えていく地方に対し、国の「これからはあまり面倒を見切れない、自立してくれ」という実情のなか、行政の効率化、地方の時代という名目の下に、いわゆる平成の大合併の嵐が日本中に吹き荒れ、わが上越地域も昨年1月14市町村が合併して新上越市が誕生した。

東京23区の約半分を有する面積は県下一ではあるが、人口は県内3番目、また日本一の「過疎都市」となった。

地方都市にとって、第二次産業（工業）の事業所、工場の立地による安定した雇用と賃金収入は、地域経済を安定させる大きな力となり、実績ある企業がこの上越にも新工場を立地してほしいと思うのは当然のことである。

行政でも多方面にわたって誘致の努力をしているが、高度成長期のような増産投資に多くを期待できない現状のなかで、多くの企業が労務費とマーケットに魅せられて海外へ流出してお

り、上越地域もその例外ではない。また、大型ショッピングセンターの出現は、市街地の沈滞をもたらしている。

研究所の設立とめざすもの

以上のような背景のなかで、上越地域が無為に時を過ごし、停滞あるいは沈滞するに任せるわけには行かないという危機感は、行政からも産業界からも伝わってくるものの、その危機を打開する手立てに至っては、暗中模索の状態といえるのが実態であり、この危機感を共有し、地域の産業振興の役割を果たすための調査・研究・提案をして行きたいという思いから、上越産業振興研究所が設立された。

「農」からの発想

我々が努力してこの地を支えていける産業は何か？

わが国の食糧自給率は40％であるが、新潟県はほぼ１００％の自給率を持ち、輸入や他県産の食品が食卓を賑わすなか、我われ新潟県は、同じ分量を他県や他国に供給していることになる。

上越においても平野部から中山間地まで圧倒的に農作地帯であり、当研究所においても、もう一度「農」に帰って地域を見直してみる必要性を痛感し、研究所の主眼を「農」に置くことにした。



もちろん農業はわが国のＧＤＰの１％に過ぎず、大きな利益を生み出す産業ではない。

しかし今や農産物は価格競争ではなく、環境負荷が少なく安全で美味しく、生産者の人柄が見えてくる物が消費者に受け入れられ、高付加価値が付く時代になっている。

このような農業は、60歳を過ぎても地域のコミュニティのなかで生産活動ができ、急速に進む上越地域の高齢化という視点からも、また地域再生という観点、まもなくリタイアする団塊の世代へのアプローチという点からも重要な産業として再確認の作業を進めて行きたい。

また、バブルの崩壊以降ここ数年、余剰人員対策のために多角化の必要性が迫られる土建業界のなかに、独自にあるいは特区制度を利用して、農業に進出を図る会社が現れているのも、「農」からの起業を考えるうえで注目されることである。

もう一つの視点

かつて、この地を支えてきた特産物があった。

たとえば上杉謙信の経済基盤の一つ越後上布（青苧から作る麻布）から、明治の高田に新しい産業として生れたバテンレースに至るまで、それらの歴史的経緯を探り、再び特産物として現代に蘇らせることができないかという産業の再発掘も研究所の一方の柱として据えている。

信用金庫の中の小さい集団であるが、実際に利益を生む事業の立ち上げへの提案を目標にしている。

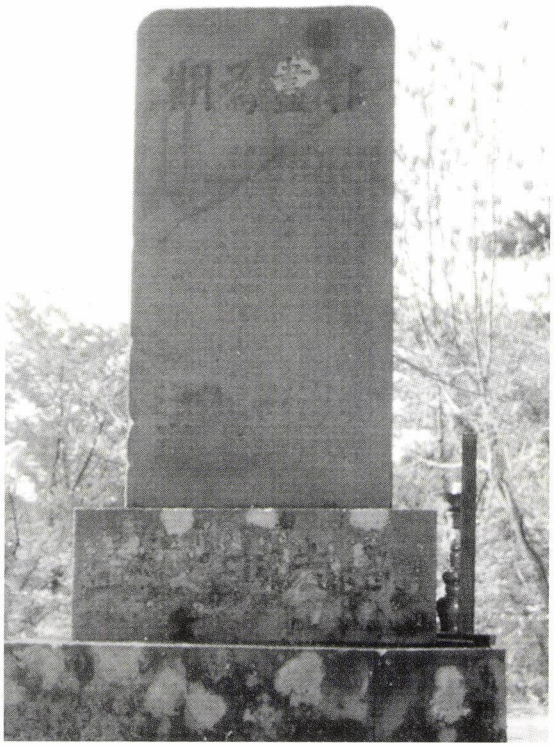
皆様のご理解とご協力をお願いしたい。

（上越産業振興研究所長・樫野亮）

歴史の風景







上　尾神岳　矢印の右斜面が現場
右　「期為盡報」の碑
左　東本願寺に展示されているソリ

東本願寺造営献木・尾神岳殉難の地

幕末の騒擾期の元治元年（一八六四）七月、蛤御門の変の兵火によって、京都の東本願寺の堂宇がことごとく消失した。明治十三年に至って再建が始まり、九年の歳月をかけて二二年に、東大寺大仏殿とともに世界最大級の木造建築が完成した。

その本願寺の宗祖親鸞を祀る御影堂と本堂である阿弥陀堂を結ぶ渡り廊下に、巨大な台持ち欅と毛綱が置かれている。欅や毛綱は、堂宇造営のための用材を引き出すためのものである。

新潟県でも新潟・柏崎・直江津・梶屋敷に木揚場を設けて用材の集積をした。

刈羽郡嶺村（現・大島区）からも、大欅の献納があり、現・高柳村の田辺重栄・重五郎の手によって台持ち欅が作成され、冬を待って引き出すことになった。ルートは嶺村から尾神岳の中腹を通り柿崎の浜までである。

晴天の日を選んで、明治十六年三月十二日、早朝から近郷近在の人々が、音頭とりと木遣りに合わせて雪の山中を引き、尾神岳の中腹にさしかかる午後二時頃、幅四〇メートル近い雪崩が突如として襲った。

二百余名の引き手が雪崩に呑まれ、男女合わせて二七名の命が失われた。そのほとんどが十代の女子である。姉妹がおぶっていたと思われる二歳という被害者もいた。

本山の手によって手厚く供養されたのは言うまでもないが、二十年九月、遭難の地に供養碑が建立された。

尾神岳は今、色とりどりのハングライダーが空を舞う基地になっている。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

編集室から

一月の半ば、松野先生のお寺へ原稿のお願いに伺った日は地吹雪の舞う荒天で、途中車を止めて風の治まるのを待つことしばしであったが、牧区は山影のため、静かに雪が降っていた。わずかな距離でこんなにも違うものかと驚いた。記録的な豪雪で、御堂の屋根まですっぽり雪に埋まっていた。

この原稿を書いているこの時季は、ちょうど親鸞が配流の地に立った頃である。

今もその風景は変わることがない、その「親鸞の風景」を一年かけて、先生にお書きいただくことにした。乞う味読。

第6巻2号　6月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」春号
第六巻一号　通巻二十一号
発行日／平成十八年三月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成十八年三月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／(株)桐朋・太田均

頒布価格／三〇〇円（送料一八〇円）